

第 145 号

農業かなざわ

編集発行 金沢市農業委員会 電話076-220-2223

金沢市農業委員会憲章

みのり豊かな金沢の土に親しむわたくしたちは、このかけがえない自然を守り魅力ある農業を築くため、誇りと責任ある行動に努めます。

- 1 農地をまもり 自然と調和する活力あるまちづくりをめざします
- 1 意欲ある担い手をそだて 農業経営の合理化をはかります
- 1 生産技術をたかめ 農地の規模拡大と有効利用をすすめます
- 1 研究と情報の輪をつなげ 暮らしと福祉の向上につとめます
- 1 時代にこたえ 健康で個性豊かな金沢の食生活をひろめます

平成3年1月28日制定

株式会社金沢アグリプライド
地域の農地を守りたい

『打木の農業のために 打木の農地のために 打木の農家のために』そしてかなざわの農業発展のために』この理念のもと、令和2年2月、市内打木町の生産者有志による農業法人「株式会社金沢アグリプライド」が設立しました。

打木町のある安原地区は、市内最大の園芸産地で、野菜や果樹、花きなどが栽培されています。打木町では、キュウリやトマトのほか、加賀野菜の「加賀太きゅうり」、「打木赤皮甘栗かぼちゃ」、「源助だいこん」なども栽培されています。そんな農業の盛んな打木町も、近年、生産者の高齢化や後継者の減少による遊休農地の発生が課題となっています。以前は、離農者の農地を地元生産者で引き受け耕作していましたが、それも限界に近づき、危機感を感じた生産者は、平成26年から県、市、J Aと共に対策について何度も検討を重ねてきました。

新規就農者を募集し受け入れたこともありましたが、なかなかうまくいかず、その後、県の助言もあり、農業法人を設立して新規就農者を社員として雇用し、遊休農地を活用する新たな事業を開始することになりました。

生産者12名が出資し法人を設立しましたが、出資者はそれぞれの経営を継続しながら、社員への技術指導や法人の運営に携わっています。総務部門、資産部門、栽培部門があり、毎月1回定例会を開催し

意見を出し合っているそうです。設立当初は社員が1名だったため、定植時など作業が追いつかないときには、それぞれ農作業の合間を縫って作業を手伝い、社員をサポートしてきました。

設立当初からの社員で、今は農場長を勤める沖野大樹さんは、もともと農業に興味があり、農業関係の会社に5年勤めた後、青年海外協力隊の活動を経て、法人に入社しました。「とにかく楽しんで仕事をしたい。労働時間を月200時間、年間で2400時間に抑え、新規就農への門戸を広げたい。法人の発展が打木町への貢献になるため、これからも頑張っていきたい。」と沖野さんは笑顔で話していました。

現在、アグリプライドは約1haの農地で加賀太きゅうり、トマト、サツマイモ、葉ボタンなど10品目を栽培し、一部を共販出荷しています。代表の太平幸久さんは「将来は独自の販路を確保し、6次産業化



太平さん（左）と沖野さん（右）

も手がけて行きたい。また、今後は離農した地元の人たちにもアルバイトで作業ができるようににしたい。」と将来の展望を熱く語っていました。

地域の農業を守り、地域の農業にプライドを持つて取り組む金沢アグリプライド。今後益々のご発展をご祈念申し上げます。

(取材 広報編集委員

西村健、米光かおる、五坊隆二)



作業に励む沖野さん



金沢ちほら ファームを訪ねて

市内の中山間地域、茅原町の川と山に挟まれた土地で農業を営む「株式会社金沢ちほらファーム」前田由美子さんにお話を伺いました。金沢ちはらファームでは、約1200本のブルーベリーを養液栽培で育てています。



前田さんと色づきはじめたブルーベリー

前田さんのご主人は薬剤師で、家庭薬配置販売業を営み、農業とは無縁の生活をしていましたが、障害を持つ人達の働き場所をつくりたいとの思いから10年前に茅原町で農業を始めたとのこと。

ブルーベリーは約20品種を栽培しており、品種によって収穫時期が違うので6月末から9月始めにかけて順次収穫します。また、完熟サインも品種によって異なるため、一粒一粒熟度を確認しながら丁寧に収穫しなければならず、とても大変な作業です。収穫が終わると順次整枝作業が始まるため、休む間もなく忙しいとのことでした。収穫したブルーベリーはネット販売のほか、卸業者やレストラン、スーパーなどに出荷し、また、ジャムやジュース、お菓子などにも加工し販売しています。

ブルーベリーのほかに紫根も3〜4年前から栽培しています。紫根とはムラサキ草の根で、そのエキスは外用薬の成分として利用されますが、栽培が非常に難しく、試行錯誤の連続だそう。収穫した根から紫根エキスを抽出し、エキス入りの保湿クリーム、入浴剤、石けんなどを製造し販売しています。紫根は染料としても使用できるそうで、商品となった紫色のスクarfやポケットチーフはとてもステキな仕上がりでした。

ブルーベリーも紫根も無農薬にこだわり栽培しており、ともに効能が知られる薬剤師ならではの選定だと感じました。栽培から商品開発まで多忙な毎日を通す前田さんですが、今後いろいろなものに挑戦していきたいと話していました。

(取材 広報編集委員

藤田 礼子、河井剛、奥村明義)



ブルーベリーの加工品など



紫根と紫根を使った商品

金沢農業大学校 研修訪問

6月10日、下安原町にある金沢農業大学校を訪ねました。金沢農業大学校は、金沢市が新たな担い手を育成するため平成18年に開設した研修機関で、実習を中心とした野菜の栽培技術や農業経営の研修を行っています。

取材当日は特別講義の日で、ナスの「農の匠」である岩田邦夫氏が講師でした。研修1年目の17期生が、実習で栽培しているナスを教材に栽培指導を受け、トマトトーンの使用手法や整枝の仕方などを教わり、皆熱心に取り組んでいました。このほか、病気の見分け方、かん水方法、追肥方法など、取材に行った私たちも大変勉強になる内容でした。優れた技術を持つ経験豊かな講師から直接指導してもらうことは、研修生にとっても大切なことであり、これからは匠の技をたくさん学んでもらいたいと思います。

講義の後、17期生の小林楓太さんにお話を伺いました。19歳とひととき若い小林さん。入校前に体験型農



ナスの特別講義

園で農作業の手伝いをしていた際、農業に興味を持ち、基礎から勉強をしたいと思い入校したそうです。現在は毎日、農業大学校に通い、ビニールハウスや露地圃場で、トマト、キュウリ、ネギなど、種まきから収穫までをすべて自分でい研修に励んでいます。

大好きなトマトを将来の経営品目にしたと考えており、養液栽培による独自の栽培方法を見つけ、味にこだわったトマトを作りたいと意気込んでいました。その夢を叶えるため、研修修了後はトマト農家で約2年の修行を経て、本格的に農業を開始する計画を立てています。「ゆくゆくは、若者を雇用し、若者が楽しく働ける農園をつくりたい。担い手不足や高齢化で元気をなくしている農業を活性化させたい。」と将来の夢について話が尽きることはない小林さんでしたが、何よりも夢を語る時の笑顔が素晴らしく頼もしく感じられました。これからも夢に向かって頑張ってください。応援しています。

(取材広報編集委員

伴美代子、松平裕喜、菊知亮)



17期生 小林さん

金沢農業大学校研修生（第18期生）の募集について

金沢農業大学校は、農業の担い手を育成するため、平成18年3月に金沢市が開設した研修機関です。実習を中心とした2年間の研修で、野菜の栽培技術等を学びます。

加賀野菜の生産や産地の活性化を担う、プロの農業者になりたい方を募集しています。

- ・対象 令和5年2月1日現在 18歳以上 65歳以下の方で、研修修了後、金沢市内で就農できる方
- ・募集人員 15名程度
- ・研修期間 2年間（令和5年2月～令和7年1月）
- ・研修日 基本研修：週2回（1日目火・金曜日）（2日目月・木曜日）午前各3時間程度
- ・申込方法 金沢市農業センターへ申込書を提出（郵送・電子メール可）
- ・申込期間 令和4年8月9日（火）～11月18日（金）※必着
- ・選考 書類及び面接による選考 面接日：令和4年12月3日（土）
- ・受講料 無料（教材費等実費負担あり）

【金沢農業大学校に関する相談・問い合わせ】 金沢市農業センター

〒920-0371 金沢市下安原町東1471 TEL (076)249-2744、FAX (076)249-4470

E-mail : noudai@city.kanazawa.ishikawa.jp





規格外品を使って 乾燥野菜・ 果物に挑戦

女性ならではの視点や感性を活かし活動する金沢の農業女子グループ「金沢農女」(愛称・ノマジョ・カナザワ)の会長、小林二伊奈さんにお話を聞きました。

金沢農女では、昨年から規格外の野菜や果物を有効活用しようと乾燥野菜の研究に取り組んでいます。昨年10月、リモート講習会で、乾燥果物を製造・販売している方から注意点や工夫していることなどを学び、農閑期を利用し乾燥野菜に挑戦しました。会員が野菜や果物を持ち寄り、JA金沢市や金沢市農業センターの乾燥機で試作を繰り返し現在も商品化に向けて奮闘中です。

小林さん自身も5年ほど前から乾燥野菜を作っており、JA金沢市ほがらか村やマルシェで販売しています。乾燥野菜を始めたきっかけは、規格外で販売できない野菜がもったいなく、知人にあげたりもしていたのですが、他に収入に結びつく方法はないかと考えるようになったことです。その後、小さな乾燥機を購入し、試行錯誤の末、商品化に繋げることができたとのことです。材料は、小林さんが栽培しているブロッコリーや、他の会員から取り寄せた規格外のダイコン、カブ、リンゴ、ニンジンで、ブ

ロッコリーはそのまま乾燥させると、えぐみも一緒に凝縮されてしまうため、一度茹でてえぐみを減らすよう工夫しています。殺菌後乾燥機で乾燥させ、袋詰めの際は、乾燥材を入れ脱気し、空気に触れないようにしています。また、パッケージに貼るシールのデザインは知人にデザインしてもらい、賞味期限の算出は業者に依頼するなど、手間暇かけて商品化された乾燥野菜は生の野菜に比べて価格は高いかもしれませんが、保存食としてもとても優れているので、これからの時代にあつた取り組みだと感じました。

小林さんは、「今後は、いろいろな乾燥野菜をブレンドし、味噌汁の具材やシチューの具材など新たな商品を開発し、金沢農女ブランドの商品化も目指したい」と、今後の抱負をたくさん語っていました。

(取材 広報編集委員

藤田礼子、伴美代子、米光かおる)



商品化した乾燥野菜
金沢農女会長 小林さん

県外農事視察研修報告

東日本大震災からの復興

5月30日から6月1日にかけて、農業委員、農地利用最適化推進委員とで、東北地方へ農事視察に行きました。

1日目は、仙台市荒浜地区にある昨年3月にオープンした「JRフルーツパーク仙台あらはま」を視察しました。荒浜地区は、11年前の東日本大震災の津波によって街すべてが呑み込まれ、多くの方が被災された場所です。この場所をもう一度、人々の笑い声と笑顔が集う場所にしたいという思いから、仙台ターミナルビル(株)が大規模観光果樹園を建設しました。約11haの敷地にはブルーベリーやブドウ、リンゴなど8品目の果樹とイチゴが栽培されており、一年を通して旬の果物の摘み取りができます。

次に、仙台東地区における農地復旧などについて視察しました。この地区は標高1〜5mの平坦な水田地帯でしたが、津波によって農地が浸食され、土砂やがれきが堆積するとともに、用排水路や排水機場などの施設が被災しました。6mかさ上げし圃場整備を行いました。その後、土地の除塩には4年もかかったそうです。

2日目は、陸前高田市高田沖地区における農地復旧について視察しました。奇跡の一本松で知られる同市は、津波によって383haの農

地が浸水し、その面積は岩手県の浸水農地面積の53%に及ぶそうです。近くの山を削り、その土で盛り土した住宅地を整備するのに7年かかり、農地復旧に着手したのが平成30年。塩害を防ぐため既存の土の除去から始まり、今年4月、ようやく農地復旧が完了しました。この地区は1枚の農地に地権者が複数いる組田が多く、区画毎に営農の意向を合わせるのに大変苦労したそうです。

海岸線にはまだまだ震災の爪痕が残っていますが、実際に復興した田畑や街並みを見て、改めて自然の力の凄さと人間の強さやたくましさを感じながら、平穩無事な生活に感謝せずにはいられませんでした。

(取材 広報編集委員 伴由美子、西村健、奥村明義)



JR フルーツパーク仙台あらはま視察

県内農事視察研修報告
有限会社 岡元農場を訪問して

能美市にある岡元農場を視察しました。岡元農場は、水稲と加賀丸いもの生産・加工・販売による複合経営を行っており、直売所の設置のほか、ネット販売や6次産業化にも取り組み、今年2月には日本農業賞大賞農林水産大臣賞を受賞しました。

代表取締役である岡元豊さんは、石川県農業短期大学を卒業後、アメリカで2年間の農業研修に参加しました。もともと実家の農業を継ぐことに対して後ろ向きだった岡元さんでしたが、研修中、楽しんで農業をしている姿に刺激を受け、帰国後22歳で親元就農したそうです。その後27歳の若さで父親から経営継承し法人化しました。経営主としての重責とともに資金の借入れなどに苦労したことも多かったそうですが、色々なことにチャレンジでき、経営の面白さも学ぶことができたといいます。就農時は9haだった農地は、現在では35haとなり、奥様と社員2名とで作業に従事し、将来の目標は40haだと話していました。

地域の伝統野菜である加賀丸いも。岡元さんが加賀丸いもの栽培を始めたのは就農2年目の頃でした。当時120戸あった生産農家は、後継者不足によって徐々に減少してゆき、これに危機感を抱いた岡元さんは奮起一番、生産体制



日本農業賞大賞
農林水産大臣賞受賞



岡元さんから説明

の強化を図るため、3つのJAに分かれている生産部会で話し合いを重ね協議会を結成しました。これにより出荷組織が一元化され、平成28年には、県内初の地理的表示(GI)の登録認証を受けるなど、産地一体で生産振興に繋げることができたとのこと。昨年は若い生産者

が5名増加し、生産量も増えつつあります。また、食育活動も熱心で、小学生を対象に加賀丸いもの植え付けや収穫体験、調理実習などを行い、子ども達に農業や地域特産品の大切さを伝えていくそうです。

経営面では、5年ごとに売上・経費・作付面積などの目標を記載した経営計画書を策定しています。経営計画書は、経営が順調に推移した場合とそうでない場合の2パターンを策定し、外的要因への対応ができるようにしているとのことでした。

また、日頃から知見を広げるため、さまざまなところに出向き、経営のことは商工会で学び、商品のデザイン等についてはいしかわ耕稼塾等で学び、そして良いと思ったことは必ず実践しているとのこと、出荷ダンボールやパッケージなども若い女性をターゲットにしたかわいいたデザインとなっていました。

ご自身も農業委員を務める岡元さんは「これからは若い方も農業委員となつて、その若い方と考えるこれからの農地の維持や利用方法等のあるべき姿を考えていって欲しい。」とも語っており、その意見には大変共感しました。

視察当日は大雨に見舞われた日でしたが、岡元さんには長時間にわたり真摯に応対くださり誠にありがとうございました。今後のより一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。

(取材) 広報編集委員

松平 裕喜、河井 剛、菊知 亮、五坊 隆一

〜老後の安心に〜

農業者年金

◎少子高齢化時代に強い年金です

自分の年金原資を自分で積み立てる積立方式の確定拠出型で、加入者や受給者の数に影響されにくい年金です。

◎農業に従事する方は加入できます

【加入資格】①年間60日以上農業に従事

②20歳以上60歳未満の方で

国民年金第一号被保険者

③60歳以上65歳未満の方で

国民年金任意加入者

◎税制面での優遇措置があります

- ・支払った保険料は、全額（年額12万円）80万4千円）が社会保険料控除（所得控除）の対象となり、所得税、住民税の節税につながります。
- ・年金資産の運用益は非課税です。

- ・将来受け取る農業者年金は公的年金等控除の対象となり、65歳以上の方であれば、公的年金等の合計額が110万円までは全額非課税となります。

来年2月頃に農業者年金制度の説明会を開催する予定です。加入資格をお持ちで未加入の皆様は積極的にご参加をお願いいたします。

お問い合わせは、

農業委員会事務局

TEL 2201-22233

J A 金沢市本店

TEL 2371-3930

J A 金沢中央本店

TEL 291-5942

年金担当まで

金沢市農地バンク

所有者の意向を確認のうえ、耕作予定がない農地で耕作可能なものを登録しています。

新たに農業を始めた方や経営規模を拡大したい方はぜひご利用ください。

金沢市農業委員会のホームページに登録農地の一覧と写真を掲載しています。



編集後記

子どもの頃からよく耳にした「地震、雷、火事、父親」。怖い順だと言われています。

6月19日に能登で震度6弱の地震がありました。金沢は震度3でしたが、久しぶりに怖いと感じました。

永く余震が続いたあげくの大地震。やはり怖いです。

今後も油断はできません。

地震に限らず、災害はいつ起こるか分かりません。これを機に備えをしっかりとしなければと思います。

(広報編集委員長 藤田 礼子)